インダス・プロジェクトを終えるにあたって

長田　俊樹
総合地球環境学研究所

0　はじめに

いつのころからだろうか、権力と権威が大嫌いになったのは。幼いころは五百円崇拝者だった。なんでも「それ五百円より高いんか」を連発していた。左翼の家庭に生まれながら、小学校のころは天皇陛下がこの世で一番えらいと信じるような少年だった。そのころは「それ天皇陛下が決めたんか」というのが口癖だった。中学生のころからだろうか。何に対しても「それは既成概念や」と叫んでは既成概念打破の戦士となった。たぶんそのころから権力と権威が大嫌いになった。そんな気がする。

権力と権威が大嫌いになると、すぐに王様は裸だと叫びたくなる。それが高じると、教師からは煙たがられる。すると、ますます反発したくなる。それがひどかったのが大学のときだ。誰かれなく、噛みつくので狂犬病にかかっているとまで言われるようになった。その結果、大学の先生からずいぶんと嫌われた。「君のような学生は必要とされていない」とか、「和を乱すから、博士課程に進まないでくれ」とか、いまならアカハラで訴えることもできるような言葉を浴びせられた。そのときは無性に腹が立った。しかし、どちらの先生も紳士として有名だったので、多くの人には「それは長田が悪い」といって笑われるのが常だった。なかには「あの先生に限って、そんなこと言うはずはない」といって相手にしてくれない人もいた。ただ、捨てる神あれば拾う神あり。社会がまだ長田に追いつかないのだから、となぐさめとも、同情ともいえない言葉で、一種の親愛の情を示してくれる人たちがいた。彼らとはいまだに付き合っている。いまや貴重な人間関係だ。

人間五〇もはるか越えて、還暦を迎えるころともなると、自分の人生はほんの偶然の積み重ねにすぎなかったはずなのに、それが必然だと思われてくるからふしぎなものである。理学部に入ったのに、理系的ものの考え方に疑問を抱き文学部に転部し、いろんなことに異議を唱えるので狂犬病にかかっているといわれ、そのあげくアカハラのような待遇を受け、その結果、日本の大学に籍を置くこともできず、インドの大学、しかも日本人が一人もいないラーンチー大学に６年も留学し、留学中に出会ったムンダ人と結婚し、娘が生まれたのを機に衛生状態がいい日本への帰国を決意し、帰国後は三〇近くの公募に応募の末、運良く日文研に就職し、助手の任期切れで京都造形芸術大学に移り二年半在籍し、そして公募に応じて地球研に就職。その軌跡がすべて、現在の自分を形成するために必要だったのだ。今だからそう言える。そう考えると、長田を露骨に排斥した今は亡きお二人の先生方には感謝するしかない。自分が違和感をもっていた先生方に、向こうから「近づくな」と警告を受けたのだから。そのまま近づいて

いたら、研究者にはなれなかったにちがいない。まして地球研でのプロジェクトなど望むべくもなかった。

権力と権威が大嫌いだと言ったが、そんな人間が大きなプロジェクトをやることになった。人生はどう転ぶかわからない。いま自分の人生はすべてが必然だったと言ったばかりだ。その舌の根も乾かないうちに、矛盾することを平気で言うのはどうかと思うが、あえて言っておこう。どう転ぶかも、きっと決まった運命だったのだから。

権力と権威が大嫌いな人間がプロジェクト・リーダーというちっぽけな権力や権威をどう操るのか。それは与えられた大きな試練だった。そんなときはいつも人生を振り返って考える。それがわたしの癖だ。きっと、有り余る時間と格闘していたインドで身につけたのだろう。狂犬病といわれていたころの自分が今の自分をみて、噛みつきたくなるような言動や行動だけは避けたい。まず真っ先に考えたのはそのことだ。つまり、権力と権威を振りかざし、矮小化された独裁者にならないことだ。これがどこまで達成されたか。プロジェクト・メンバーに聞くしかない。つぎに、よく思ったのは「アカンかったら辞めたらええやん」。そう自分に言い聞かせることは、思いのほか、精神を安定させるのに効果を発揮した。じじつ、インドでは死を覚悟するような病気に何度か罹ったが、それから考えるとプロジェクトがうまく行こうが行くまいがたいしたことではない。

回り道だらけの人生で、「地球研に入りたいのですが」と質問されれば、「インドに 6 年留学すればいい」とうそぶく。生真面目に冗談人生を送りたい。関西で生まれ、笑いを取ることに無上の喜びを覚える。そういう環境で育ったせいか、単なる楽しい冗談みたいな人生ではなく、真面目になればなるほど笑いがこみ上げてくる。そんな人生を送りたいと願ってきた。いま一度ここで立ち止まって考えてみると、我ながらその目標をクリアーしているのではないか。紆余曲折、山あり谷あり、けっして順調にはいかなかった人生だが、そんな人生にどこかで満足している。なんと幸せなことか。

前置きが長くなってしまったが、インダス・プロジェクトを終了するにあたって、プロジェクトの軌跡を振り返ってみようと思う。

1　インダス・プロジェクトが立ち上がるまで

現在のインダス・プロジェクト、正式には『環境変化とインダス文明』という名称のプロジェクトが本研究となったのは 2007 年 4 月のことである。本研究になるまでが結構長かった。もう一度、原点に戻って、本研究までの道のりから述べてみたい。

地球研の公募が出たのは 2003 年の 3 月ごろだった。その当時は京都造形芸術大学にいた。その大学にはあまり長くいたくなかった。というのも、ワンマン経営の理事長には覚えが悪く、日文研 OB の芳賀徹学長、山折哲雄大学院長の腰巾着のように思われていたからだ。日文研の助手から造形大の教授になり、「三階級特進」などと言われて有頂天になっていたのもつかの間、給料、とくに理事長の査定によるボーナスは安く、日文研助手の年収よりも教授の年収の方が低くなった。これは自虐ネタにはもってこいだが、日文研を退職するに当たり、公務員宿舎から出て家を購入した身にはローンが重くのしかかった。給料だけではない。専門とは遠いバラバラの講義演題の授業を週 7 コマもたされ、しかも 200 名近くの学生を相手にする講義もあっ

た。大学の雰囲気も、理事長にこびる人と反理事長でいつかは大学から出たいと思う人とでギスギスしていて、あまり楽しくなかった。そんな状態だったので、公募にはアンテナをたてていた。

地球研の公募はプロジェクトを行う教授とプロジェクトを補佐する助教授の両方あり、文理融合のプロジェクトを行うところに触手が動いた。インドの少数民族と環境問題に焦点をあてよう。最初に考えたのはそうしたテーマのプロジェクトだった。しかし、これではインド政府からヴィザが下りない。つまり、インド政府は少数民族問題に外国人が首をつっこむことを良しとしないだろうという計算が働き、プロジェクトをたてる前に断念した。そこでつぎに浮かんだのがインダス文明をテーマとするプロジェクトだった。

インダス文明は四大古代文明と一つといわれながらも、もう一つよくわからない。とくに、インダス文字が未解読なので、テキストに基づいた歴史が描けない。インダス文字については留学以前から興味をもっていた。インド最古の民族はムンダだと言われているが、それならばインダス文字はムンダ語で読めるのではないか。留学中には、そんなことを夢想していたのでインダス文明関連の本は集めて読んでいた。日本語で書かれたインダス文明関連の本は非常に少なく、インダス文明遺跡が日本人の手で発掘されていないことを知り、ぜひ発掘をやってみたいと思った。さいわい、日文研に在籍中に、安田喜憲さんのところに何人かのインド考古学者が来ていたので、発掘をやってくれそうな知り合いはいる。そこで、言語学と考古学主体のプロジェクト『言語学的手法による古代文明の生活環境復元の試み－インダス文明を例として』という名で公募に応じた。

一次の書類審査に合格し、二次はプレゼンと面接を行うことになる。場所は京都駅前のぱるるプラザ（現メルクパルク）で、6 月 24 日の 15:20 からプレゼンと面接が行われた。その当時はパワーポイントの使い方もわからず、OHP でのプレゼンだった。OHP でプレゼンすることも初めてだったので、ずいぶんととまどったことだけはよく覚えている。後の評価委員会での経験に比べると、ずっと好意的な質問しかなかったように記憶する。人は結果がいいと、そのときの難しい質問などは記憶から吹っ飛んでしまう。だから、いやな質問を忘れてしまったのかもしれない。7 月 11 日には和田教授から採用通知の電話をもらい、地球研への赴任が決まったのである。

こうして 2003 年 10 月 1 日、当時間借りしていた旧春日小学校で、日高所長から辞令をもらいプロジェクトをはじめることになった。このころはまだプロジェクトへ到達するのに険しい道のりがあることなど夢にさえ思わなかった。地球研に入ると、すぐに IS がはじまった。そして、12 月にプロジェクト発表会があり、はじめて発表会の壮絶ぶりを体験する。もっともこの年は発表会での発表はなかったので、自分の身に降りかかることになるという実感がまったくなく、他人事として聞いていた。2004 年 4 月からは FS となった。その当時は FS でも 1000 万の予算がついたので、事務に沖田さんに入ってもらった。5 月にはカラクワルさんが客員として赴任し、プロジェクト態勢が整ったことになる。2005 年 1 月にはカラクワルさんにインドに行ってもらい、発掘地をカーンメールと決め、2005 年 3 月の評価委員会に臨んだ。
運命の 3 月 15 日、場所はホテルグランヴィアの一室だった。発表はプロジェクト・リーダーが英語で行うことになっていて、補佐役としてカラクワルさんに会場まで同行してもらった。昔は上がり症だったが、日文研の面接でもあがらなかったし、インドから帰ってきてからは上がり症はとうに直った。そう思ってきたが、その当日、なぜか極度に緊張しうまくプレゼンが

できなかった。まだまだ悟りにはほど遠い。小心者の自分をこれほど情けないと感じた日はない。ただでさえ上がっているのに、最初の質問が強烈だった。「あなたのプロジェクトをどこの研究所でやっていただいても結構ですが、この地球研では絶対認めません」と地球環境戦略研究機関理事長の森嶌さんが口火を切ると、あとは否定的なコメントや質問が続き、これはダメだと妙に覚悟を決めた。

そういうわけで、最初の評価委員会での評価はさんざんたる結果だった。評価委員の持ち点が 0 点から 4 点まであり、評点の平均点が 2.0 以上あると本研究に進めるという制度になっていたが、私のプレゼンにつけられた評価は 0 点を付けた人が 5 人もいて、16 人の平均点は 1 点にも満たないものだった。私自身、プレゼンがひどかったので、プロジェクトが本研究に進むのが難しいことは納得していたが、この 0 点には正直驚いた。文系の先生方なら、いくらプロジェクトがひどいと感じたとしても 0 点は付けないだろう。1 点ぐらいはつける。ところが、理系の先生は容赦なく 0 点を付けるのだから、びっくりである。私がこれまでどんな研究をしてきたのか。どれほどの業績をあげてきたのか。それは一切加味されず、プレゼンで決められてしまう。プロジェクト制度の恐ろしさと共に、これでは文系の人がプロジェクトを立ち上げるのはなかなか難しい。それがあの評価委員会を体験したときの率直な感想である。じじつ、そのとき同じ文系の木下さんのプロジェクトも落とされている。

80 年代後半、私はインドに 6 年間住んだ経験がある。インドといっても、大邸宅のマハラジャのような日本人外交官や商社マン生活ではない。電気もガスも水道もなく、もちろんお湯など望むべくもなく、水は井戸から汲む生活だ。今のようにインターネットも携帯電話もなく、日本とのやりとりは手紙、ニュースはラジオ日本だけだった。そうした生活の中で自分を支えつづけることができたのは、もちろん日本の家族や友人からの励ましの手紙や支援のおかげである。そのことはどんなに強調してもけっして誇張し過ぎることはない。しかし、それだけでは 6 年間は長すぎる。インドへの適応性と何事にも適応させるために必要な柔軟性がなければとても耐えられなかったにちがいない。この適応性と柔軟性は地球研でも発揮できるはずだ。プレゼン中心のプロジェクト評価委員会に文句を言ってもはじまらない。評価委員会の審査に合格し、プロジェクトが本研究にあがるためにはどうすればいいのか。すぐ気持ちを切り替えて、通るための策を真剣に検討した。そこで、私はプロジェクトを根本から変えることにした。理系の人たちにもっと積極的に参加してもらうこととし、タイトルも『環境変化とインダス文明』と変えたのである。

こうして二回目の FS を迎えた。同期の佐藤さんは無事本研究に進んだため、沖田さんは佐藤プロジェクトに移り、プロジェクトを立てることを辞めてしまった木下さんの下で働いていた長谷さんを事務担当に迎えての二年目だった。この年に決断しなくてはならないことがあった。それは発掘をはじめるべきか、それとも本研究が決まるまで発掘はやめるかということだ。その選択はカラクワルさんの熱意もあって、意外と簡単に決まり、発掘を始めることになった。2006 年 1 月、カーンメール遺跡の発掘は開始された。あとは評価委員会を通過するだけだ。もし通過できなければ、発掘は一年かぎりのものとなってしまう。

この年は評価委員会の始まる前に、春日から上賀茂への移転があった。本を山のように抱える身にはそれも結構大変な作業だった。まだ FS のプロジェクトには研究員はおらず、長谷さんと引っ越しの準備をした。本を箱詰めするときには後に上級プロジェクト研究員になる森若葉さんが旦那様と共に手伝ってくれた。引っ越し後の評価委員会は上賀茂の新しい建物で行わ

れた。今度は前回のように上がることもなく、「アカンかったらしゃーない。潔く辞めるか」そういう気分だった。こうした気分が功を奏したのか。あるいはプロジェクトの構成を変更したのが認められたのか。なんとか評価委員会をクリアーしたのである。

しかし、この評価委員会はかなり後味の悪いものだった。それはドイツからの二名の評価委員が強硬に本研究にあげることに反対したからだ。彼らの主張は言語学者がこんな古環境研究などできるはずもないというものだった。これには正直、評価委員の資質を疑う。文理融合を謳い文句にする研究所のプロジェクトで、文系出身のプロジェクト・リーダーが理系的要素を取り入れたら、「そんなことできるはずもない」というのはいかがなものか。文理融合などあり得ないと言っているようなものである。評価委員会であれほど反対した彼らは、その後このプロジェクトについて検証することもなく、言い放しになっていてその責任を誰も追及しない。昨年度の評価委員会はわれわれのプロジェクトに高評価を与えてくれたが、その事実をあのとき 0 点を付けた人たちはどう思っているのだろうか。こうした「できるはずがない」といったハラスメントまがいの謂われなき評価をする評価委員を私は断固として忘れない。彼らには私が受けた心の傷に思いをはせる気持ちがあるのだろうか。

ここで、あえて提言したい。評価委員の評価があってもしかるべきではないか。検察審査会など、評価や裁判をおこなう審査自体をもう一度ちがった形で行える制度はいまや一般的である。ぜひ真剣に検討していただきたい。

2　地球研のプロジェクト発表会

2006 年 4 月、プレ・リサーチが始まった。ここで森さんがプロジェクトに研究員として赴任された。またこの年は、客員としてシンデさんが三ヶ月滞在し、その後にはパルポラさんが六ヶ月地球研に滞在した。

ここで、地球研のプロジェクト発表会について書いておきたい。プロジェクト発表会は毎年 12 月に各プロジェクトが成果を発表する場である。最初のころはプロジェクトの数が少なかったので二日で済んでいたが、プロジェクトが 15 本立ち上がってからは三日間開催されている。二日間で実施されたときは当時の日高所長が司会を一人で務めておられたが、その後は議長団が組織され司会は回り持ちとなった。

この発表会でまず指摘したいのは、他人には関心がないが、非寛容な参加者の態度である。まるでいまの日本社会の縮図だ。われわれのプロジェクトはよく批判の対象となった。それはたぶんに私自身の発表がうまくなかったことによる。そのことは素直に認め反省材料として、その後の発表で生かしてきたつもりである。パワポによる発表の文法みたいなものを理解するまで時間がかかったが、少なくとも今は技術的には上達したように思う。しかし、発表のできの良し悪しはべつにして、最初から頭ごなしに反対するケースが多かった。つまり非寛容、このプロジェクトは地球研のプロジェクトとして認めない、あるいは認めたくないという立場がまず目立った。その割に、こうしたらどうかとか、これを考えるとよくなるのではないかという関与した形での提言がほとんどみられなかった。

われわれのプロジェクトへの非寛容でいつも困ったことは、インダス文明という古代の環境問題が現在問題となっている環境問題とどう関わるかという質問だった。その背後にあるのは、

二十世紀以降、特徴的に見られる環境問題、たとえば一番よく例としてあげられる化石燃料を使うことで起こる環境劣化や熱帯雨林の伐採による環境問題など、それだけが地球研が扱うべき問題であって、古代の環境問題などは扱うべきではないという立場だ。最初の評価委員会で森嶌さんがいみじくも指摘されたのは、まさにそのことである。

古代文明の環境問題を地球研のプロジェクトとして含めるべきである。わたしはそうした立場にいる。みんなそう思っているようだが、それは誤解である。地球研が古代文明に関心をもって、そうしたプロジェクトを立てる気があるのならば、喜んで参加したいというのがより正確である。もっと踏み込んで言うならば、地球研はこうあるべきだという発想は非常に危険だ。というのも、環境問題というただでさえドグマに陥りやすいテーマでは、こうあるべきだという発想は一方で排除の論理を生み出すからだ。われわれのプロジェクトはその排除の論理のターゲットとなってしまったのである。ある教授はわれわれの発表に対するコメントに、文明研究をしたいのなら日文研に帰れというずいぶん乱暴で子供じみた発言を書かれたこともある。ここまで露骨なあきれた発言は、教授の個人的な資質の問題で一般的とは言いがたいが、ここまで思わずとも、われわれのプロジェクトに違和感をもった人が多かったことは事実だ。古代文明こそが地球研のテーマとしてふさわしい。温故知新というではないか。そのことを強硬に主張するだけでは、こうした立場の違いを埋めることはできない。古代文明の環境問題といったテーマを地球研のプロジェクトとして含めるべきか、含めるべきでないかの問題については、文明環境史というプログラムが立ち上がって解決したかに見えた。しかし、それでも解決したわけではない。何度も何度も排除の論理が降ってわく。難しい問題である。私が唯一できるのは、評価委員会の助言にしたがってプロジェクトを進めることと、排除の論理に与しないために、発表会でよそ様のプロジェクトの評価に関わるような発言や審査に加わらないことぐらいだった。

ただし、ここで一つだけ指摘しておく必要がある。それは、私がすでに地球研に採用されていて、しかも私のプロジェクトテーマが地球研の人事採用委員会で承認されていたことである。私から言えば、すでに古代文明を地球研のプロジェクトとすることが決定されているのに、なぜ今さらここで非寛容を前面に打ち出した質問に答えていかなければならないのか。そのダブルスタンダードともいうべき状況を、うまく消化できなかった。その点は私自身の問題だったかもしれないが、割り切れなさゆえに、かつて狂犬病といわれていながら、この問題に関しては吠える気にはとうていなれなかった。もう一つ吠える気にならなかったのは、われわれのプロジェクトへの批判を口にする人が若く将来をもった人だったからだ。若い人が環境ファンダメンタリストとして、排除の論理を振りかざすことは、哀れな気持ちがわきこそすれ、怒りはどうしても浮かんでこなかった。これがモタモタした受け答えを生み、ますます排除の論理に火がついた。そういった面は否めない。

この問題でうれしかったことも書いておきたい。地球研の中野さんがこんなことを言ってくれた。「長田さんのプロジェクトが地球環境問題に入らないことは、みんなわかっているはずですよ。ここで議論すべきなのは長田さんのプロジェクトをいかによくするかですよ」。ここでいう地球環境問題は狭い意味の、環境ファンダメンタリストが叫ぶような環境問題なのだと理解すると、前半の言葉が持つ意味が積極的に評価できる。彼の好意的な発言には感謝するしかない。

もう一つ言っておかなければならないことがある。こうしたプロジェクト発表会での窮地を

救って下さったのは他でもない日高前所長だった。そのことは感謝をしても感謝しきれない。採用人事で採用した以上、責任もってかばって下さった。私のプロジェクトを支えるべく、日高さんは好意的にかばってくれた。つまり、日高さんの覚えがよかったので、プロジェクトを最後まで進めることができた。そのことは、逆に言えば、プロジェクトを評価する上には、中立かつ客観的立場で行うべきだという大原則からはかなりずれてしまった。現に、日高さんが気に入らなかったので、プロジェクトが立ち上がらなかったプロジェクトもある。その事実を直視すると、なかなか複雑な気分になる。バイアスなき評価はありえない。森嶌さんのバイアスは長田を排除し、日高さんのバイアスは長田を救った。それが最も自己相対化された評価ではなかろうか。

プロジェクトへの排他的発言はプレ・リサーチの年が一番激しかった。そのときプロジェクトにいた森さんや長谷さんにはかなり怖い思いをさせてしまった。申し訳ない。

このプロジェクト発表会については、プロジェクトが終わる時点できちんと書いておくべきだと考えてきたので、ここに記すしだいである。

3　プロジェクトの本研究 2007 - 2010

2007 年 4 月から本研究が始まった。それを機に、上級プロジェクト研究員として、大西さんが、プロジェクト研究員として上杉さんと寺村さんが、そしてプロジェクト推進支援員として園田さんが赴任された。また、園田さんの負担を軽くするために、2008 年 4 月から、河村さんが事務担当で赴任された。

じつは、この年からはプロジェクト活動報告書を発行している。2007 年度、2008 年度、2009 年度の三冊を読んでいただければ、われわれの活動を知っていただけるはずである。そこで、どんな活動をしたかについてはここで繰り返す気はない。インドやネパールで共同研究をおこなうためには何をなすべきか。ここではそのノウハウを含めて、今後のために残しておきたい。

まずインドのヴィザの話からはじめたい。昔から、インドでのリサーチヴィザを取得するのはかなり大変だった。これがインドをフィールドとする研究がなかなか進まない大きな原因の一つであることはまちがいない。まず、こちらが日本のインド大使館や領事館に申請した書類はインド本国に送られる。本国紹介というものは、はてしなく時間がかかってしまう。というのも、インド国内で、インドと海外の大学とが共同研究をおこなう場合には、三つの省庁から許可を取らなくてはならない。一つは文科省にあたる教育省で、もう一つは内務省、最後は外務省が許可してヴィザ発行にいたる。それぞれの省庁で一度手続きが滞ってしまうと、なかなか前に進まない。

これをクリアーするためには、インドの共同研究者にかなり協力していただくことが大前提となる。われわれの場合は、コアメンバーであるカラクワルさんがよく動いてくれた。たとえば、内務省の許可がなかなか出なかったので、デリーの担当部署まで出向いて、どうなったかを調べてくれた。そうすると、担当者の書類の中に埋もれていただけであることがわかった。担当者は対応の悪さをわびて、書類にサインしてくれたのである。これがまさしくインドの典型例だ。どこかで書類が滞ることはよくあり、それをフォローアップしなくては許認可がうまくい

かない。

もう一つ、南アジアの特徴なのかもしれないが、日本の大使館からインドの教育省に推薦状を送ると効果的だといわれている。さいわいにも、私には外務省に知り合いがいたので、相談したところ、デリーにある日本の文化センターの担当者を紹介して下さった。早速会いにいったところ、「他にもそうした前例があるので、わかりました。推薦状を書きましょう」という二つ返事をもらった。外務省関係者の知り合いがいたために、こちらはそれほど難しくはなかったが、何も知り合いがなく、コンタクトした場合ははたしてどうだろうか。

このプロジェクトの間に、リサーチヴィザは本国紹介が必要でなくなり、それぞれの大使館や領事館でリサーチヴィザが下りることとなった。そのときに必要なのはインドの大学とのMOU で、MOU ベースで、受け入れ機関のサインがあれば、日本ですべてが済む、画期的な制度である。この制度からいえるのは、まずしっかりと MOU を結ぶことがますます必要となる。私は MOU を結ぶときはなるべく先方に出かけていったが、顔と顔を合わせて MOU を締結することも非常に重要である。また、領事館等で問題が生じたときに、インドで対応してくれる人がいるかどうかも大事だ。一度、リサーチヴィザが下りないときがあったが、カラクワルさんから電話をしてもらい、ヴィザ担当者に納得してもらったこともある。

つぎに、発掘の許可について述べる。これは ASI (Archaeological Survey of India) が担当部署である。いつも 7 月に申請書を出し、10 月に申請書を検討する会が開催され、許可が下りれば、翌年 9 月まで発掘ができる許可書がもらえる。発掘をする場合には、この ASI が発行した許可書もリサーチヴィザ申請のために重要である。そのことを一言付け加えておく。この許可書はインドの大学などが行う発掘においても必要である。海外の大学等が発掘の許可を申請する場合は、インドのカウンターパートから許可書を申請することになる。海外の大学だけが単独で申請できるかどうかは定かではないが、私が知っているかぎりではインド国内のカウンターパートが必要なようである。ここでもカウンターパートとの MOU があると、ASI の許可を取得する際に有利に働く。一度、ASI がファルマーナー遺跡の発掘許可をペンディングしたことがあった。カウンターパートのシンデさんが MOU を提出していなかったからだ。シンデさんに聞くと、「ノー・プロブレム」と少しもあわてる様子がなかったが、これもインド特有の対応である。私は ASI に直接行って、MOU を提出したところ、程なく許可が下りた。この辺も、今後の共同研究をするためには重要である。

ASI の発掘許可が下りたからといって、必ず発掘ができるわけではない。現地の人との関係をうまく築かないと発掘はできない。まず、発掘場所の地主が自分たちの土地を発掘することに同意しなくてはいけない。また、村民にも説明が必要だ。発掘の実働部隊は村人にお願いすることになるから、彼らとの協力なしには発掘はできない。村にはカースト制度があり、それを踏みにじるような行為は慎まないといけない。カーンメール遺跡の発掘ではあらゆるカーストから平等に参加してもらうよう、カラクワルさんが気をつけていたが、こうした配慮は外国人にはなかなかむずかしい。こんなことを考えても、外国人隊だけでの発掘は現実的でないだろう。

さらに発掘の許可だけで発掘ができない場合もある。それは遺跡の場所が国立公園内にあったりすると、森林局や自然公園局などからの許可が必要になる場合もある。ボーリングなどでは警察からの許可が必要になることもある。いずれにせよ、現地をよく知るインドのカウンターパートとよく相談する必要がある。ただし、ここで警戒すべきことがある。それはカウンター

パートのインド人研究者を間違えると、すぐに調査が滞ることになる。海外の研究者から財政援助を得られることだけを念頭に置いたインド研究者が結構いるからだ。彼らはちゃんとした手続きを踏まない。つまり、人間関係や賄賂などで許認可の問題はすべて解決できると考える人がカウンターパートとなると、共同研究は暗礁に乗り上げてしまう。

これに関連して、もう一つ指摘しておきたい。ケンブリッジ大学がわれわれのプロジェクトとほぼ似たプロジェクトを立ち上げている。ケンブリッジ大学がベナレス・ヒンドゥー大学（BHU）と共同で、『Land, Water and Settlement』という名のプロジェクトを立てたのは 2007 年のことで、以下を謳い文句としている。

Archaeologists and geographers have long debated the possible link between environmental change and the rise and fall of the earliest civilizations in South Asia. This collaborative project is the first stage of a broader programme that will integrate geographical and archaeological field research and analysis to reconstruct the transforming cultural and environmental landscape of northwest India in the critical period between 2000 and 300 BC. This was when the courses of a number of major rivers are believed to have shifted.

This project marks the first integrated investigation of the environmental and cultural processes that accompanied these shifts and their impact on cultural development, and brings together the best of Indian and British expertise in the relevant human and environmental sciences. Understanding how and why past Indian societies responded to environmental threats and changes has critical resonance with current questions of human response to climatic and environmental change.

これを読んで一番の感想は、われわれのプロジェクトとなんと似ていることか、ということであった。とくに、この二番目のパラグラフで This project marks the first integrated investigation of the environmental and cultural processes と述べているが、このプロジェクトを最初の総合的調査と言われると首をかしげてしまう。そこで、このプロジェクトのリーダーであるキャメロン・ペトリーに以下の内容のメールを出したことがある。

まず、ケンブリッジのプロジェクトの目的がわれわれのプロジェクトの目的と非常に似通っていること、それなのにケンブリッジが最初の総合調査と銘打っていること、しかし、プロジェクトがはじまったのはわれわれの方が先なので、最初というのは適切ではないこと、それにもかかわらず、われわれのプロジェクトへの言及すらないこと、そして、このメールの目的はケンブリッジのプロジェクトに対して挑戦状を送ることではなく、一緒に共同研究を行おうというものである。

残念ながら、これに関してはなんの返事ももらっていない。われわれがアメリカ地球物理学連合（AGU）のチャップマン会議に出席する際に、ケンブリッジからも多くの方が発表する予定だったので、そこでゆっくりと話をしようと意気込んでアメリカに向かった。今年の 3 月のことだ。

チャップマン会議に行ってみると、ケンブリッジのプロジェクトに関わる発表は、地質学者のサンジーヴ・グプタさん（インド出身だが、現在は英国籍）だけで、キャメロンをはじめ、プロジェクトの考古学者たちは出席していなかった。驚いて理由を聞くと、インド側がヴィザを下ろさないと言っているので、あわててインドに行ってヴィザの問題などの交渉に追われていて、アメリカには来られなかった。また、ポスター発表もインド側からの許可がないので発

表できないということであった。

そこで、彼らのホームページを開いてみると、2008 年の活動以降、更新されていないことを知る。その後ようやく 8 月にホームページが更新されたが、なんとタイトルである『Land, Water and Settlement』がホームページから消えていた。また、前のホームページはケンブリッジ大学のプロジェクトが全面に出ていたが、BHU との共同研究であることが強調されるようになった。ケンブリッジ大学が共同研究であることに注意を払わなかったのは非常に問題であることはまちがいない。とくに、インド側との十分な連携を行ってこなかったことが、すぐにヴィザの問題などに響いてくる。

このことはわれわれにもいつ起きてもおかしくないことである。このケンブリッジのプロジェクトを他山の石としたい。そう思い、ここに記しておく。

4　インダス・プロジェクトによってわかったこと

最後に、このプロジェクトでわかったことを書いておく。一年の計は元旦にあり。そう思って、2011 年 1 月 1 日に執筆したものをベースとしている。ここで示される考えは言うまでもなく私個人のものである。ご意見があれば、なんなりと寄せていただきたい。

インダス文明遺跡は南北 1400 キロメートル、東西 1600 キロメートルに分布する。これだけの広い分布を誇る文明の自然環境は、当然のことながら一様ではない。その自然環境の違いは現在の降水量をみると一目瞭然である。インダス文明地域は夏雨型の地域と春・冬雨型の地域の境界線に分布し、しかもその境界線には年間降水量が 100 ミリに満たないタール砂漠が広がっている。

こうした自然環境がインダス文明期にもあまり変わらないことを示したデータがある。それが遺跡から出土した植物遺体の分析図である。これによると、夏雨を利用した夏作地域と春・冬雨を利用した冬作地域、それにどちらも利用した混作地域の三地域があり、このうち、夏作地域と冬作地域は現在の夏雨地帯と春・冬雨地帯の分布にほぼ一致している。

こうした自然環境のことなる地域に広がるインダス文明は、中央集権的な権力を象徴するような記念物や建造物がないことで知られている。かなり大規模な都市が少なくともパキスタン・シンド州のモヘンジョダロ、パキスタン・パンジャーブ州のハラッパー、パキスタンのチョーリスターンにあるガンヴェリワーラー、インド・グジャラート州のドーラーヴィーラー、そしてインド・ハリヤーナー州のラーキーガリーの五都市が知られており、これら都市を中心に、ことなった地域がゆるやかなネットワークを形成したものがインダス文明の実体である。そう考えるのが、現在のインダス文明研究者のコンセンサスである。

地域的な違いについては、われわれが発掘をおこなった、グジャラート州カーンメール遺跡とハリヤーナー州ファルマーナー遺跡を比較すればよくわかる。両者は 900 キロメートル離れ、カーンメール遺跡は海岸に近い場所に位置し、ファルマーナー遺跡はガッガル川沿いの平野部にある。2005-2009 年の過去 5 年間の年間降水量平均（データはインド気象庁による）を比べると、カーンメール遺跡のあるカッチ県のブジでは 460 ミリに対し、ファルマーナー遺跡のあるロータク県ロータクでは 490 ミリとほとんど変わらないが、前者は 10 月から 5 月まで月別降水量が 1 ミリ以下（ただし 2008 年 12 月に 14.6 ミリ記録したが、これは例外である）なの

に対し、後者は 2 月から 5 月にここ 5 年の平均で 106 ミリの降雨がある。ファルマーナー遺跡周辺では冬作であるムギ作が可能だが、カーンメール遺跡周辺では冬作物は難しい。なお、ファルマーナー遺跡周辺は緑の革命以後、灌漑が進み、今ではコムギの一大穀倉地帯である。

その遺跡の構造についても、かなりの相違点がある。カーンメール遺跡では石積みにされた城塞をもつのに対し、ファルマーナー遺跡では日干し煉瓦でできた建物がみつかっている。とくに、前者は 10 m近い強固な壁が築かれており、カッチ県のシカールプル遺跡にも同様の壁があるし、石積みの建造物はドーラーヴィーラー遺跡やスールコータダー遺跡など、カッチ県ではよくみられることから、地域的な特徴と考えられる。ただし、インダス印章や貴石を用いたアクセサリー類には共通のものがみられ、そこがまさに「ことなった地域がゆるやかなネットワークを形成したもの」をインダス文明とよぶ所以なのである。

これらの地域が活発に行き来していたことを示す研究がある。それがローの研究である。この研究はインダス・プロジェクトから出版された。ローはインダス文明を特徴づけるインダス印章の材料となる凍石や貴石類によるアクセサリーの原石が、どのようにして採石場から加工場へと流通し、そして加工場から製品として流通していったかを同位体分析などの科学手法を使ってあきらかにしている。その経路は驚くほど多様で、インダス文明の地域間交易がいかに活発だったのかを如実に物語っている。さらにいえば、羊や山羊はすでに家畜化されていたので、インダス文明地域間を羊や山羊をつれて遊牧していたようなノマドの存在も十分考えられる。また、インダス印章にも登場することから、牛の利用はまちがいなくおこなわれていたし、牛車の模型が出土することから、地域間交流には陸上輸送の手段として牛車が使われ、川や海では船舶による輸送がおこなわれていた。

こうした交流にインダス印章が使われたことは間違いない。カーンメール遺跡でみつかった三つのペンダントは、表には同一の印章が押印され、裏にはことなった文字が刻まれているが、表の押印された印章は地域を表し、裏には個々人の名が記されていたと考えると、インダス印章とそれに刻まれたインダス文字がそれぞれの地域や交易品を示していたのかもしれない。なお、このインダス印章はメソポタミア文明地域からもみつかっており、こうした交易はインダス文明地域間だけではなく、インダス文明とメソポタミア文明間でもおこなわれていた。そのことは楔形文字文献からも確認できる。

インダス文明社会は現在のインド亜大陸の状況と同じく、多民族多言語であったと考えるのが妥当である。しかも、こうした交易を行う人々は多言語使用者であり、それぞれの地域内の情報はお互いに交換していたと考えられる。日本のような単一言語が一般的だと考える社会では、多言語社会が異質と考えがちであるが、現在のインドでは英語、州言語、家庭内言語の三言語を話す人は珍しくない。こうした多言語社会では、インダス文字をそれぞれの社会が独自の言語で別々に読んでいたと思われるが、インダス文字が書かれた資料が短文で終わるのはこうした状況（ハンコには長文が使われないのは日本や中国でも同様である）と交易で使われる記号的要素が高かったことに起因するのではなかろうか。

インドが現在もインダス文明期も多民族多言語社会だったこと、つまり時間軸に関連して言えば、インドは古い文化を保存しやすい地域と言えるかもしれない。われわれのプロジェクトでも、こうした例を発見している。それはインド矮性コムギの再発見である。緑の革命以後、農業の急速な近代化の前に、次々と伝統品種が姿を消していったのであるが、インドではインダス文明遺跡から発見されているインド矮性コムギが、現在なお栽培されていることを確認し

ている。

インダス文明は決して大河文明ではない。大河文明とは、大河がもたらす水の恩恵によって成立している文明をいう。たしかに、インダス水系沿いのモヘンジョダロやハラッパーはこうした川に依存していただろう。しかし、インド・グジャラート州やパキスタンのマクラン海岸などはアラビア海に面している。また、最近のパキスタン・SAL 大学のマッラーさんの研究によると、タール砂漠の西端沿いにインダス文明遺跡が広がっていることがわかってきた。これら遺跡に住んでいた人々は乾燥地帯で、どのように生活してきたのか。発掘がおこなわれていない現在の段階で、はっきりとしたことはわからないが、彼らは農業定住民よりも遊牧民だったのではないだろうか。ヨルダンでの藤井純夫金沢大学教授の研究などは砂漠地帯での生存手段やドメスティケーションのプロセスを考えるうえで手助けとなろう。

大河文明ということで言えば、インダス川以外のガッガル＝ハークラー川が大河だったという説もある。しかし、これは前杢教授グループの研究で、現在のガッガル川が少なくともインダス文明期に大河だった可能性は否定されている。ガッガル川流域に広がる砂丘地帯はインダス文明期以前にはすでに存在しており、砂丘のうえに、インダス文明遺跡がある。インダス文明は単にモヘンジョダロやハラッパーのような大都市だけが存在したのではなく、こうした都市間を結ぶ地域にも、遊牧民や工芸職人などが点在し、かなり流動性の高い、他の地域に依存しあった社会だった。

こうした交易による、他地域とのゆるやかな連合体としてのインダス文明は、バランスによって成立していた。ところが、グジャラート州では海水準が 2 mほど下がったことから、かなりの船舶輸送はおこなえなくなった。また、冬雨地帯は年間降水量が少ない地域だが、モンスーンによって大量の夏雨がもたらされる地帯の方が農業に適する。こうした情報は遊牧民やアクセサリーなどを運ぶ移動商人などによって、かなり広い地域に行き渡っていたため、現在のパキスタン地域よりインド側へと人々は移住していったのだろう。いろんな物資の交流を促進させるために発達していったインダス文明の大都市は、こうした交流の滞りとともに、都市機能を果たさなくなっていったのがインダス文明の衰退なのではなかろうか。

これまでの文明観を根底から覆す発想が必要である。従来はどうしてもエジプト文明やメソポタミア文明の同時代の古代文明から類推するのが一般的であった。そこで、穀物倉などは必須のアイテムと考えられ、モヘンジョダロでも、ハラッパーでも穀物倉跡とする遺構がある。しかし、それは近年否定されてきている。ハラッパー遺跡のいわゆる「穀物倉」跡を説明する立て看板には穀物倉ではないとはっきり書かれているほどだ。また、一世を風靡したアーリヤ人侵入説も、権力闘争史観とでもいうべき考え方に基づいた安易な考え方だった。これらすべてはヨーロッパ人中心主義的な古代文明観が色濃く反映されている。そういっていいと思う。では、われわれはどう考えていけばいいのか。多民族多言語社会で、多種多様な生業をもつ人々が寄り集まって大きな大都市が生まれ、農業の形態も、住居空間も地域的なことなりをもち、しかしインダス印章や貴石類などを共通の文化要素として共有していた人々、これらがインダス文明を担った人々の実体なのである。こうした多種多様な混雑した社会は他ならぬ現代のインド社会とも共通している。つまり、インダス文明を理解するキーは現在インド社会にある。これが、このプロジェクトで得たインダス文明観である。